

ロボット手術の質向上

部会新設で情報共有

内視鏡手術支援ロボット「ダヴィンチ」の導入が本道で広がりつつある中、道臨床工学技士会(室橋高男会長)は、ロボット手術作業部会を新設した。保守点検など管理を担う臨床工学技士の視点で困っていることやトラブル事例等情報を共有し、レベルアップを図っていく。

道臨床工学技士会

導入施設は、これまで新しい医療機器のため「手探り」で対応しなければならず、戸惑うことが多い(室橋高男会長)と問題提起。これまでのトラブルは、「手術室に設置したが、電源容量が足りなかった」「使用しない時のための保管室と手術室の動線を考えていなかった」「エラーコード(五桁の数字)が表示されても説明書に記載はないため、エラー内容が操作によるものか機械の故障か分からず、メーカーに問い合わせた」など多岐にわたるとい

う。導入からセッティングまで臨床工学技士を中心に行う施設が多い上、手術中にエラーが示された場合、迅速に原因を特定しなければ手術に支障を来すだけに、臨床工学技士の役割は大きい。職能団体としてロボット手術を取り巻く課題を一つ一つ解決していくため、新たに設けた作業部会は、五施設十人で組織。初会合は中央区の、ほくたけメディカルトレーニングセンター「ヴィレツ

ングセンター」で二十一日に「ジプラス」で各施設で作製している機器のチェックリストやマニュアルを持ち寄って互いに参照するほか、導入から現在までに気になった事例を報告し合う。橋本修一委員長(札幌大病院)は、「全く新しい機器なので、各施設の事例を集積して対応策を考え、マニュアル化したい」と展望。これから設置する施設がスムーズに導入できるアドバースもしていく。同会の取り組みは、道府県技士会に先駆けた動きで、年三〜四回べ

ー스에서会合を開く方針。臨床工学技士の専門性を生かし、どのような役割を果たすべきか、情報共有と業務展開の方向性を模索していく。米国メーカーが開発した手術支援ロボットは、医師が三次元モニターを見ながら内視鏡カメラと三本のアームを遠隔操作して手術する。従来の内視鏡手術より精度の高い手術が特色の一つで、わが国で二十一年に薬事承認され、前立腺全摘出術に対し二十四年度から保険適用。道内では七施設で稼働しており、導入予定施設も複数ある。

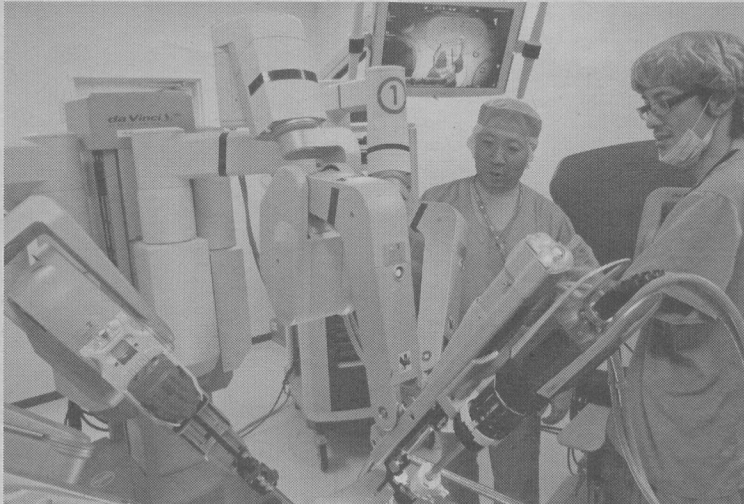
生涯学習の拠点に

道放射線技師会 研修センター改修

道放射線技師会(板東道夫会長)は、中央区に構える研修センターをリニューアルした。最大百人までの研修会開催が可能なと

ら徒歩五分圏内の住宅地で、八年に全国の道府県技師会に先駆けて開設。RC造三階建てで一階に会議室と書庫、二階に事務局、三階に定員五十人の研修室を配置する。改修に当たっては、研修室を拡張して定員を二

安全性を追求するため、臨床工学技士による管理が欠かせない



研修センターは、地下鉄東西線西28丁目駅から徒歩で約10分、最大百人までの研修会開催が可能なと

研修センターは、地下鉄東西線西28丁目駅から徒歩で約10分、最大百人までの研修会開催が可能なと

研修センターは、地下鉄東西線西28丁目駅から徒歩で約10分、最大百人までの研修会開催が可能なと